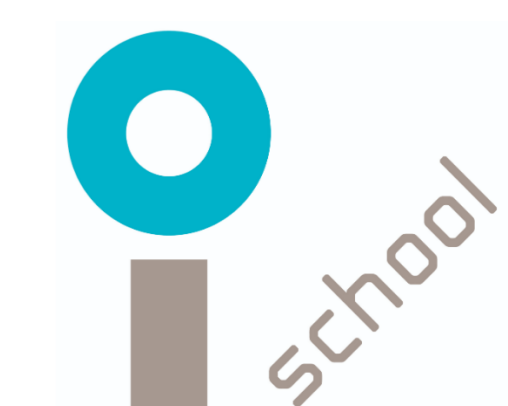


# イノベーションワークショップにおけるアイデア選択の失敗要因の分析



i.school Research Assistant 彭思雄

## 要旨

ワークショップは、イノベーションやイノベーション教育の中で中心的な活動の1つであるが、ワークショップ中の参加者の言動のデータを取り、ワークショップ中で起きた現象を明らかにして、そこからワークショップの改善案を得ようとする取り組みは軽視されている。そこで、i.schoolのワークショップを題材に、参加者の言動のデータに基づいた分析がイノベーションの方法の改善につながる実例を示す。2019年4月にi.schoolで行われたワークショップ「農業の未来」において、D班は良いアイデアを生み出したにも関わらず、班としてそのアイデアを選択するのに失敗した。電子付箋ツール Apisnote、360度カメラ、インタビューのデータを元にその原因を分析すると、試行錯誤の過程における焦りから、リーダーが効率良い議論を優先し、チームメンバーの心理的安全性の低下をもたらしたことがアイデアの選択に失敗に繋がったことが分かった。ここから、特にチームが焦りやすい試行錯誤のプロセスにおいて、効率性を重視しつつも、チーム内外の意見を柔軟に取捨選択できる環境を作るサポートを提供することが必要だという示唆を得ることができた。

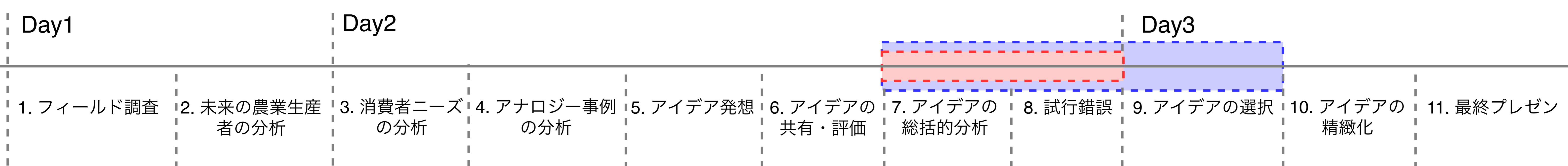
## ワークショップ概要

2019年4月27日から29日にかけて、教育プログラムi.schoolにて「農業の未来」というワークショップが行われた。参加者は「消費者のニーズに関する情報を生産者に提供する新しくインパクトの大きい手段」を最終日に提案する。参加者はi.schoolに参加する学生であり、思考レベルやイノベーションに対する関心などの基準で選ばれた大学生または大学院生である。専門分野は医療、建築、経済など多岐にわたり、年齢も20歳から45歳と幅がある。5人で1つのチームを作り、それぞれのチームには昨年度のi.school修了生がディスカッションパートナー(DP)として議論のサポートに入る。

## 目的

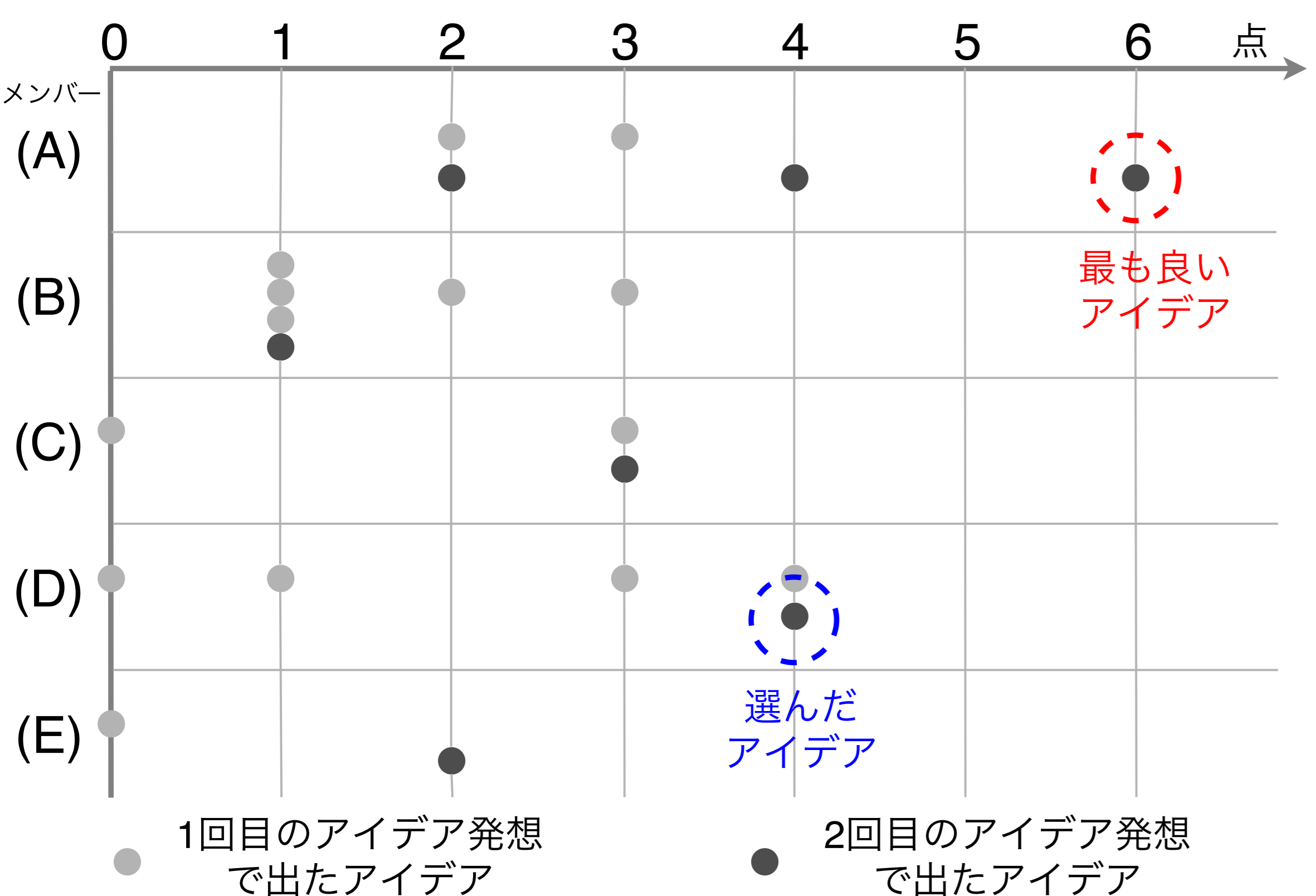
分析するワークショップにおいて、D班は良いアイデアが創出されていたのにも関わらずそれをチームとして選択できなかった。これを確かめると共に、その失敗要因を特定することを通じて、参加者の言動のデータに基づいたワークショップの分析がイノベーションやイノベーション教育の方法の改善のための知見をにつながるという実例を示す。

## ワークショッププロセス



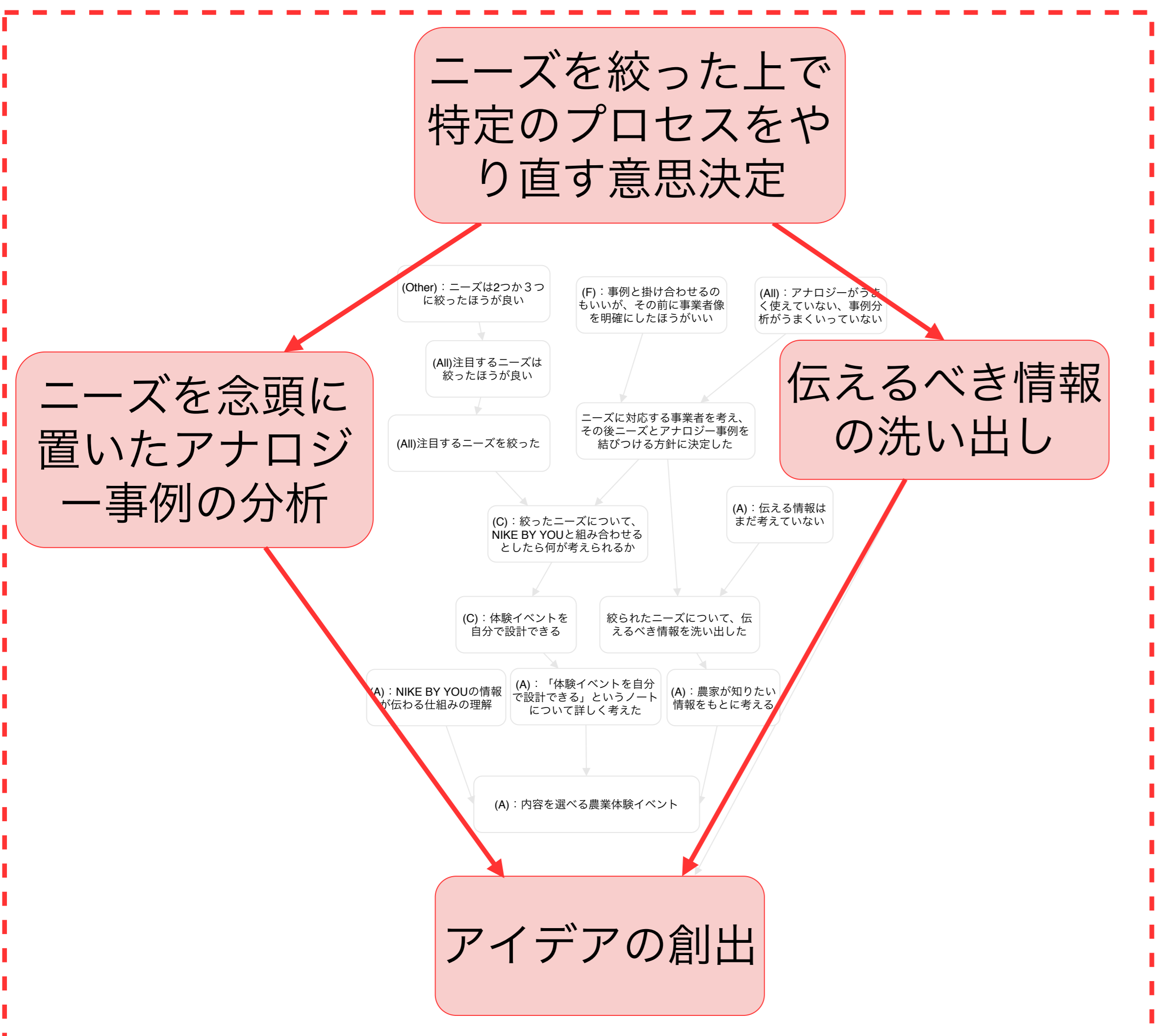
## アイデア評価

D班は(5.アイデア発想)で1回、(8.試行錯誤)でもう1回アイデア発想を行った。アイデア評価の結果、(A)が2回目に発想したアイデアの1つは他のアイデアに比べて特に良いアイデアであった。



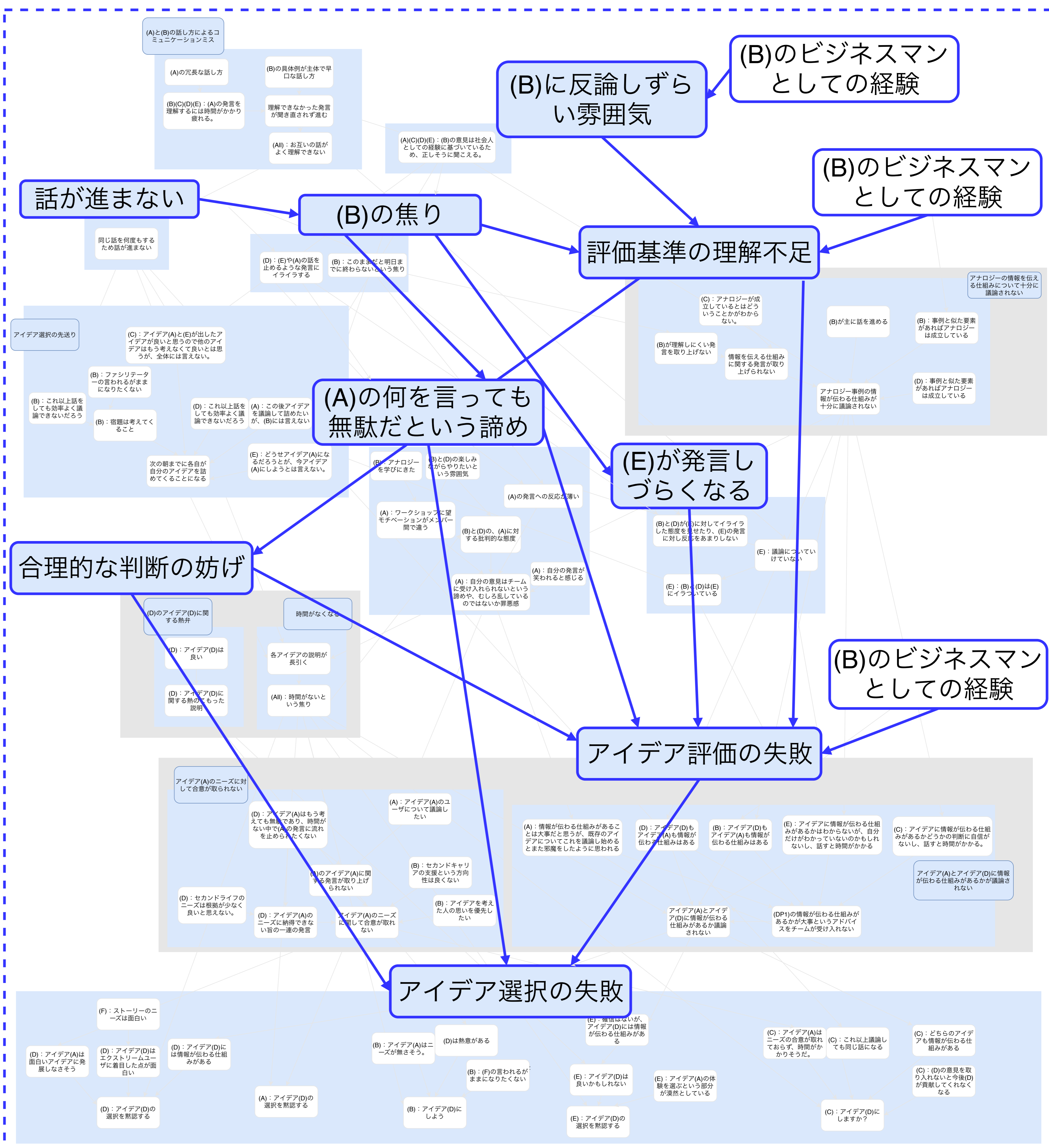
## 良いアイデアの創出に至る過程

1回目のアイデア発想の後、出てきたアイデアの分析とファシリテーターを含む外部者からのアドバイスを元に、2つのニーズについて、これに関する事業者と伝えるべき情報を分析し、その後アナロジー事例の分析を行った。これらの分析によって出てきた情報を元に、(A)はアイデアを創出した。



## アイデア選択の失敗に至る過程

アイデアの総括的分析後、だんだんと(B)は時間がないという焦りを感じ、議論の効率の悪さに対して苛立ちが募るようになった。効率性を重視するがゆえに他の人の意見を受け入れることが難しくなり、かつ他のメンバーが社会人経験のある(B)に反論しづらさを感じていたことから、自然と(B)の意見が強く議論に反映されることとなった。しかし、(B)はビジネススマンとしての経験による先入観から今回のワークショップの趣旨を解釈しそこなっていた。これがチームメンバーの評価基準の理解、評価の実施、合理的な判断を妨げることに繋がると共に、D班はアイデア選択に失敗した。



## 考察

本事例のように1回目のアイデア発想後の試行錯誤の場面では先が見えないことからチームメンバーに焦りが先行することはしばしば起きることであり、この時にリーダーが強く主導権を握り、結果的に多様な意見の受け入れを妨げることは少なくない。このことから、特にチームが焦りやすい試行錯誤のプロセスにおいて、効率性を重視しつつも、意見を柔軟に取捨選択できるような環境を作るサポートをワークショップ中に提供することが必要であることが示唆される。このように、ワークショップ中の映像データや参加者へのインタビューからワークショップの結果につながる要因を特定することで、ワークショップの改善に資する示唆を得ることができた。

## 今後の研究

本研究では、筆者が映像や参加者へのインタビューを元に因果関係分析を行なったが、このような因果関係分析をより効率的に行える方法の開発が求められる。例えば、参加者の感情や会話の偏りが可視化されたり、それぞれの発言何らかの指標をもって分類されたりすると、ワークショップの結果を説明する仮説がより少ない労力で立てられ、今後のイノベーションやイノベーション教育の取り組みがますます発展していくであろう。